

「傷寒論の三陽三陰編について」

～初学者の時にこそ押さえておきたい“混乱しない”傷寒論～

会頭：別府正志

中医学を始めとした東洋医学は伝統医学ですから、当然古典の存在を意識しなければなりませんよね。みなさんは中医学の古典、と言ったら何を思い浮かべるでしょうか？『素問』でしょうか？『靈樞』でしょうか？『神農本草經』とおっしゃる方もおいでかもしれません。しかしなんとと言っても最も重要な古典といえば『傷寒論』をおいて他にはないでしょう。

では、その『傷寒論』には何が書いてあるのでしょうか？それを知るためによくあるのは、太陽病編から読んでいく読み方です。でも、ご存知でしょうか。太陽病編は第 5 章から始まるということを。本当は、傷寒論は辨脈法・平脈法という脈診を述べた部分から始まります。診断学ですね。次に傷寒例という総論部分があり、その後、各論に入ります。しかも太陽病編の前にひとつ弁痙湿暍脈証編という部分があり、ようやくその後三陽三陰編が始まるのです。

太陽病より前の部分は後の人の書いた部分だから読まなくていい、なんて議論もありますが、そんな事はありません。こちらもしっかり勉強しなければいけないのですが、今回の講演では、それであっても最も重要な三陽三陰編の読み解き方について述べていきたいと考えています。

ここでは『傷寒論』として、ベースとしては『宋板傷寒論』を置きます。『註解傷寒論』やそれ以降の傷寒論（康平本や康治本を含む）については触れません。しかし、シンポジウム「宋以前の古典を中心とした、正しい古典の認識とは」でも触れられているように、『宋板傷寒論』はかなり“変わった”傷寒論です。11 世紀に出版された際、校正医書局によって大きく改変が加えられ、そのためここを出発点とするととてつもなくわかりにくい本となっています。ざっと構成を見ただけでも、太陽病編だけ異様に肥大していて上中下と別れていて全部で 178 条もあるのに、例えば少陽病編はたった 10 条、太陰編に至ってはわずか 8 条しかないのです。おかしいと思いませんか？

『傷寒論』は、もとは張仲景が著したとされていますが、『宋板傷寒論』以外にも多数の文献に引用されています。『宋板傷寒論』はその一つに過ぎません。他の傷寒論引用本、具体的には『脉經』『備急千金要方』『千金翼方』『太平聖恵方』『金匱玉函經』、そして日本の国宝『医心方』などを通覧することにより、本来の『傷寒論』の姿がおぼろげながら見えてきます。

本講演では、そのようにして理解した『傷寒論』三陽三陰編がどのような形のものであったのか、初学者でもわかるような形でご提示したいと思っています。

初学者ほど、きちんと『傷寒論』の位置づけを理解しておくことが重要です。はじめに間違った道を歩き始めるとその後修正できないほど遠くへ行ってしまうからね。

ひとつだけ講演の中で触れることの例を挙げておきましょう。

『宋板傷寒論』太陽病編 第十二条

太陽中風、陽浮而陰弱、陽浮者、熱自發、陰弱者、汗自出、嗇嗇惡寒、淅淅惡風、翁翁發熱、鼻鳴、乾嘔者、桂枝湯主之

この条文は、恐らく真面目に傷寒論を読み始めた人が最初につまずく条文です。特に「陽浮而陰弱」がよくわからないのです。わからないまま、教わった先生、あるいは読んでいる本に書いてあることを鵜呑みにしていくしかない、ということになります。例えば現在発行されている本の中では最も良い現代語訳がついていると思われる東洋学術出版社『現代語訳・宋本傷寒論』では、「脈象は軽取では浮、沈取では弱」と訳されています。ここの陽・陰を脈の軽取・沈取ととっているわけで、歴史上そういう解釈も充分あるのですが、本文にそう書いてあるわけではありません。しかし、宋板にこだわらなければ、実にわかりやすく書いてある本があるのです。ここでは『太平聖恵方』をとりあげます。この本は宋改を経っていない貴重な本です。

太陽病中風、脈其陽浮而弱。浮者熱自發。弱者汗自出。・・・(後略)

これをみれば、「脈の陽が浮き、かつ弱い」ということだということが明確にわかります。脈が浮いているから熱が自ずから出て、弱だから自汗がでる。うん、とてもわかりやすい。

宋板にとらわれずに傷寒論を通覧し、宋板のヘンテコさを実感してもらい、これがこの講演の目的になります。肩肘張らずにいらっしやってください。